が，その背景にある家族の人間関係の問題を常に私は感じていたからである。家族の内における子供の心理学的位置は変化してきている。それは現在の文化的，社会的，歴史的背景の内で家族とその子供達は存在しており，その背景に最も鋭敏な反応を示している存在が子供達なのだ。そこで，厳しい生活条件の中で，また，家族構成がどんどん変化していっている過疎地域における家族内人間関係，および家族間人間関係の変化の急流の内にいる人々に直接会うことにより，真に人間の動く姿を把握しようという目的で参加していった。グループ全体としては4ケ所を調査した訳であるが，私は山形県大蔵村と島根県頓原町の調査に参加した。本年度では前述の目的の分析までには至らなかったが，その面接記録を基礎資料としてまとめるにとどまった。(詳細は本紀要参照)

第三には，村上英治助教授をチーフとする「重度精神薄弱児への人間学的接近」の研究班に参加し，昭和45年8月21日から25日までの5日間，愛知県心身障害者コロニーはるひ台学園において，重度精神薄弱児とのとりくみを行なった。ここでの体験は，遊戯療法における基本的な人間と人間の出会いにおける体験過程，特に言語を持たない生物学的存在に近い我々の仲間である彼等の内に，人間的存在を発見でき，そこにある人間学的意味を見ることができたという，貴重な体験であった。(詳細は本紀要参照)

以上，臨床心理実践の展開の内で主なるものを述べてきた。これらの活動のまとめが決して研究成果と評価しているのではなく，その活動を通して，私自身の C. P. としての成長が少しでもあったことを自から評価し，意味あるものと考えている。その点で，日本臨床心理学会第5回大会より問いかけられた C. P. への基本的な責任性，および社会体制と臨床心理実践への問いかけは，本年度の私の研究活動（臨床心理実践）へ重要な影響を与えた事は事実である。とかく，私のように大学にいる C. P. は，温室の草のように社会からの問いかけを受けとめることのできにくい存在であるが，そこから脱皮しようとした一年であった。しかし，反省してみるに，まだ本質的なものを見ることができず，私自身の内にその問いかけが十分に統合されたものにはできていなかった。この点は，さらに臨床心理実践（研究活動）を通して展開し，真にクライエントのための臨床心理学を追求していきたいと願うのである。

この1年の歩み　　村上英治

1. 昭和44年4月，14年にわたる教養部生活をはなれて教育学部へうつってきた。4.28声明・見解を契機として，研究者としての私たち大学人の基本的姿勢がきびしくまた重く，問いかけられつづけたこの1年，私は私なりの自己課題として，これらの告発を謙虚にうけとめてきたつもりである。今キャンパスは表面的に冷静にもどっている。この時点においてこそ，私たちは改めて，大学の問題を，学問研究のありかたを，自分自身の歩みをとおして，深く省察しなければならないと考える。

大学改革への歩みはけわしく，またきびしい。全般的な改革への志向を決して忘れることなく，これを具現化するための着実な努力を自らに課するとともに，私は私自身，大学における学生相談室担当の立場からしても，その実践をとおして，大学における教育状況を阻害するものをとらえ，そうした状況にあって疎外されていく人間性に改悛のきざしを与えていきたいと願う。文部省総合研究費「学生の適応異常に関する研究」の分担研究者として，私は，45年1月，蒲郡におけるこの研究班の会合での討議において，こうした観点からの多くの示唆を得たし，これらの体験にもとづく私の基本的な構えは，第一法規の教育叢書第11巻「教育指導」の中の一章に「大学における教育指導」（印刷中）と題して提起されている。

2. 私は，私自身，Clinical Psychologist (C. P.) としての Identity に立つ。その私にとって，44年10月日本臨床心理学会第5回名古屋大会での問いかけは，大学問題における上記の問いかけ同様，きびしくまた重いものであった。この問いかけは自らに発せられて，今もなお問いかけつづけられている。こうした問いかけに対する私自身のいらえは，45年10月第6回九州大会へ理事会提案として出された「総括と展望」のまえがきのところにくわしい。またあるべき医療臨床のすがたをうたう視点は，愛知県城山精神衛生相談所報第6号（'69）に，精神衛生センター設立をめぐる特集の中で，「偶感」として私の見解を提起した。あるべきC. P. とは何か，C. P. として20年の私自身，また何をしてき，何をしてこなかったのか，問題はきわめて重大である。真に「Client のために」と志向する，臨床の本義に立ちもどっての実践を，研究を私は失ってはならない。そしてそれに徹するために，それらの Client がおかれる，さまざまの状

況から決して眼をそらせてはならないのである。社会運動体的機能を推進していく一翼を，より強力にになって歩むべきだと私は考える。

3. こうした視点に立って，精神病者への接近も，従来主として準拠していた，ともすれば，個人主義的・心理主義的水準からの超越が要請されてこよう。八事病院を臨床の場として実践してきた，私のC. P. としての活動は，この年，研究の段階でも，関心はひろく，そうした病者の背後に向けられてきた。44年10月，日本臨床心理学会第5回大会で報告し，教育学部紀要第16巻（'69）に所載された「同一家系内に同時に多発した精神病者の家族研究」はこうした視点に立つものであり，それを第1段階として，今年なおその対象を追いつづけているのである。同じく八事病院においてなされ，臨床心理学研究9巻1号（'70）に所載の論文「評定法による S. C. T. 分析の試み」は，42年4月，東海心理学会第16回大会で報告された研究のまとめであるが，非定型精神病者の臨床像の変化との関連を，医師の協力を得ながら総合的に追ってきたものであるにしろ，その時点における問題意識として，なお甘いものがあったことを否定できない。

4. 多年にわたる私自身の Rorschach 研究の視点も，ここ数年，次第にその重点がうつりつつある。「ロールシャッハ・テストのサインアプローチをめぐって」と題するシンポジウムは，日本臨床心理学会第5回大会のスケジュール変更によって，実現をみなかったが，そこで提案しようとした「ロールシャッハ法への現像学的接近」の試みは，ここ数年，私たち，現像学研究グループの，ささやかながらつみ重ねてきた討論の集積であり，ロールシャッハ・サインのいたずらな一人歩きに対する反省を投げかけ，かけがえのない歴史的一回的存在である人間への深い関心をよびもどそうとの意図をもつものである。45年度東海学術奨励金を得て，現在なお，私たちの討論をひきつづき深めているし，この間の研究の展開に関しては45年8月，日本心理学会第34回大会のシンポジウム「臨床的問題に適用された理論と技法」における「投映法の治療的接近」という主題での問題提起の中でのべられた。

5. こうした，悩める生きた個としての人間存在への深い関心は，私自身の研究課題の今ひとつの柱ともいうべき，精神薄弱児への接近にも新らしい展開を，私の中によびさましている。今夏，愛知県心身障害者コロニー，はるひ台学園における，重度精神薄弱児に対する私どものとりくみは，私にとって，またきびしい衝撃であり，精神薄弱児に対する私のまた新らしい開眼であったともいえる。これら子どもたちとのかかわりの体験は，「重度精神薄弱児に対する人間学的接近（序報）」として，45年10月，東海心理学会第19回大会に報告され，この紀要第17巻にまとめられている。

精神薄弱児に対する今ひとつの接近は，ここ数年にわたる，金沢大学富安芳和らとの共同研究，「精神薄弱児の適応行動尺度に関する研究」である。44年度，文部省の科学試験研究費を得て，具体的な適応行動尺度の日本版作成の段階に到った。精神薄弱児に対する判別基準をめぐる論争の中から，問題の提起がなされ，知能とならんで適応行動の水準をはかることによって，判別の指針たらしめようと意図するとともに，それが具体的な指導の上にも，より積極的に有効に利用されることをねらいとするもので，今年度そのための研究費は特別に得られなかったけれど，北海道地区をもふくめてのサンプル蒐集に努力し，その標準化を十全のものたらしめようと期している。45年10月，日本教育心理学会第12回総会における報告はこの研究についての今日までの経由成果のまとめである。

これら精神薄弱児に対する研究の視点も，私なりに，私のうちには，次第に統合されてきている。ともあれ，大学斗争をとおして，自己課題として自らに問いかけてきた，私自身の研究に対する基本的姿勢を常に忘れることなく，私はそれぞれの領域における私自身のささやかな研究の歩みを今後もふみしめていきたいと考える。

研究の経過と方向づけ　　大橋正夫

個人研究

私の研究の最終的な目標は，対人関係の心理学の体系を樹立することである。この道は遠く，険しいが，現在のところ次の三つの方向から少しずつ手がけている。

1. 対人関係の心理学的構造：対人関係という語は，日常的のみならず，心理学用語としても広く使用されている。しかしこの概念的定義はまだ定かではない。私は本年度学部において「対人関係の心理学」を開講した機会に，この問題をいささか考究した。まだ明白な理論を提出する段階にはないが，その枠組を得かかった状態にあるといえる。これまで私は対人関係を理解する枠組と